慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本開國史上の一新史料
Sub Title	
Author	岩井, 大慧(Iwai, Hirosato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.17, No.1 (1938. 8) ,p.1- 48
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	口繪:フィラデルフィア インクヮイヤー號外
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380800-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Philadelphia Inquirer—Supplement.

PHILADELPHIA, JUNE 9, 1860.

The Philadelphia Inquirer

Our Trade with Japan.

ENTERTAINMENT OF THE [illegible] BY COMMODORE PERRY.

AUTOGRAPHS OF THE JAPANESE AMBASSADORS.

Japanese Shoes.

Blacksmiths.

Japanese Blacksmiths' Bellows.

The Japanese Clock.

TOMMY AMONG THE LADIES.

Japanese Inkstand and Brush.

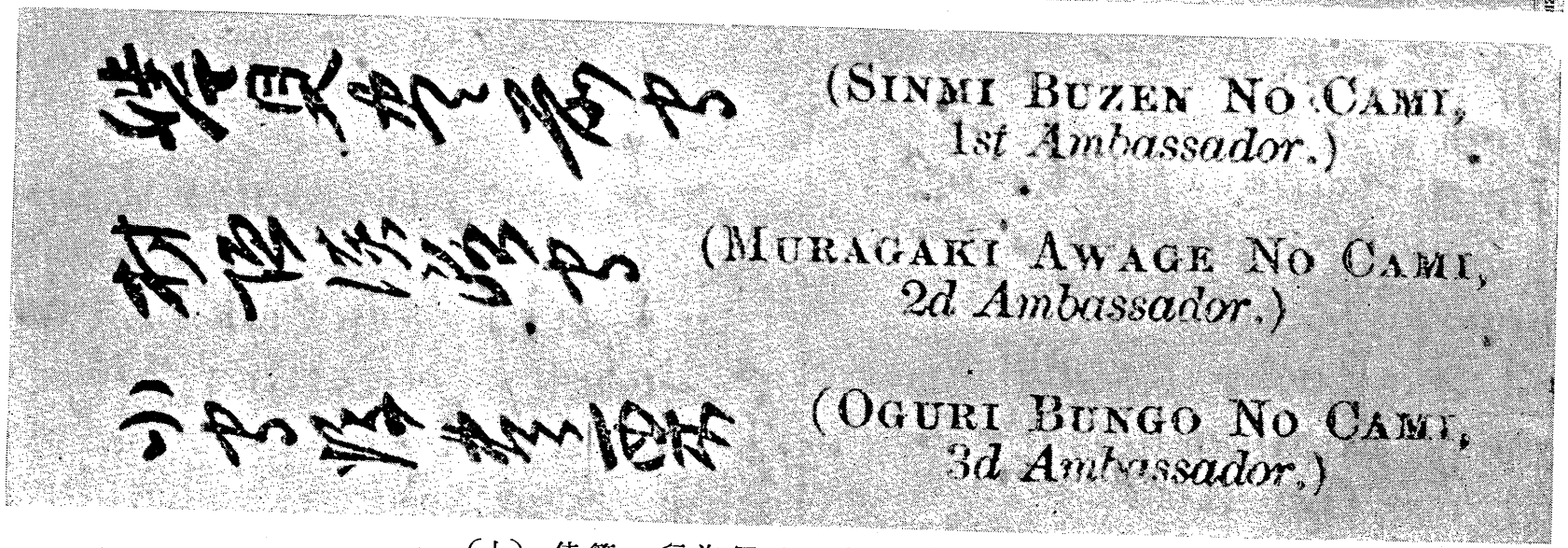
Rivalry.

Japanese Musical Instruments.

Political Apprehension of Ziogoon.

JAPANESE KITCHEN AND HALL.

フィラデルフィア　インクヮイヤー號外第一頁全貌



（上）使節一行海軍兵工廠見學記念撮影

（下）三使節の署名名刺

日本開國史上の一新史料

岩井大慧

一　はしがき
二　太平洋と日米
三　日本との交易
四　ペリー提督の琉球人歡待
五　三使節の署名
六　矢立と毛筆
七　マルコ・ポーロの日本紹介
八　太閤樣の御世
九　關白の政治的疑懼
一〇　千六百年和蘭人渡來
一一　競爭
一二　英人の日本來航
一三　和時計
一四　日本鍛冶屋と輔
一五　日本の臺所と茶の間
一六　下駄足駄草履草鞋
一七　和樂器
一八　トミーと貴婦人
一九　海軍兵工廠見學記念撮影
二〇　日本料理自炊場
二一　日本人安座喫煙
二二　日本のクッション
二三　日本小部屋の道具
二四　結びの言葉

各節題下の數字(1)(2)(3)……は第一頁並に第二頁掲載のもの、(一)(二)(三)……は第四頁に在る意を表はす爲に殊更に變へたのである。

一　はしがき

昨昭和十二年六月、本誌第十六卷第二號に清岡暎一氏は「萬延元年遣米使節と咸臨丸のハワイ寄港」と題し、富田正文氏は「萬延元年米布見聞に關する報告」と題し、また會田倉吉氏は「初期の日米關係概說」に就いて、各自その見るところを載せてをられたから、讀者は既にこの問題に就いては、十分知見を了されてゐることと思ふ。

それにも拘らず、自分がここに敢へて筆を執る所以のものは、この新史料が我が遣米使節著米直後のものであり、史料として最も珍とすべきものの一つであらうと考へたからである。またこれを紹介することによつて、日本開國史上に、興味ある一挿話を加へ得ることが出來れば、望外の幸であるとも思つたからである。

昭和六年十二月、自分の關係してゐる東洋文庫が、評議員新渡戸稻造博士のお口添で、某亞米利加人から一八六〇年六月九日（土曜）發行のフィラデルフィア・インクワイヤー誌の一枚の號外を讓受けた。この西曆日附は、我が孝明天皇萬延元年四月二十日に當り、我が國最初の遣米使節の一行が、費府に入市したときに、日本使節歡迎の爲に、刊行された特輯記念號とでもいふべきものである。

いま先づその外形を說明し、次にその內容に移らうと思ふ。

號外と言つても、今日のスリップ刷りのものではなく、全く普通の新聞紙大のもので、竪曲尺の一尺九寸二分、横二尺六寸四分の一枚紙を、横を眞二つに中心から折つて、四頁にしてゐる。併し頁付けはない。寫眞に於いて見らるるやうに、毎頁六コーラムに分ち、第一頁第一コーラムに、(1)日本との交易、(2)太閤樣の御世、(3)競爭者の三項目、次は第二、三、四コーラムを打通してエッチングで挿繪を挾み、トップに(4)ペリー提督の琉球人招宴、中央に(5)トミーと貴婦人、最下に、(6)日本の臺所と茶の間の三項目、更に第五、六コーラムのトップに(7)三使節の署名、(8)日本の諸履物、(下駄・足駄・草履・草鞋)(9)鍛冶屋と鞴、(10)和時計、(11)矢立と毛筆、(12)和樂器、及び(13)將軍の政治的疑懼の七項目等を載せてゐる。以上のうち(1)(2)(3)(7)(13)を除いては、すべて挿圖の説明である。

次に第四頁には殆ど記事らしきものなく、挿繪のみで、その間に簡單に注記説明してゐるだけである。全頁を竪に眞二つに仕切り、上部全面に、(一)同年五月二十四日一行が華府の海軍兵工廠見學のときの記念撮影を掲げ、下部を更に三つに仕切り、その右方に(二)ウィラードホテル内の彼等の料理自炊所、左方に(五)同ホテル内日本人安座喫煙の狀景、中央上部に(三)箱枕(クッションとせるは誤解なり)、下部に(四)經机をいづれもエッチングで掲出してゐる。

更に第三頁の第一コーラム約四分の一位のところに、(14)英國人の日本來航、(15)西紀一千六百年和蘭人の渡來の二項を掲げ、第六コーラム最下部に、(16)西紀一千二百九十五年マルコ・ポーロの日本に關する

報告を載せてゐる。他の大部分及び第三頁は全部、使節一行とは何等關係なき普通の記事である。

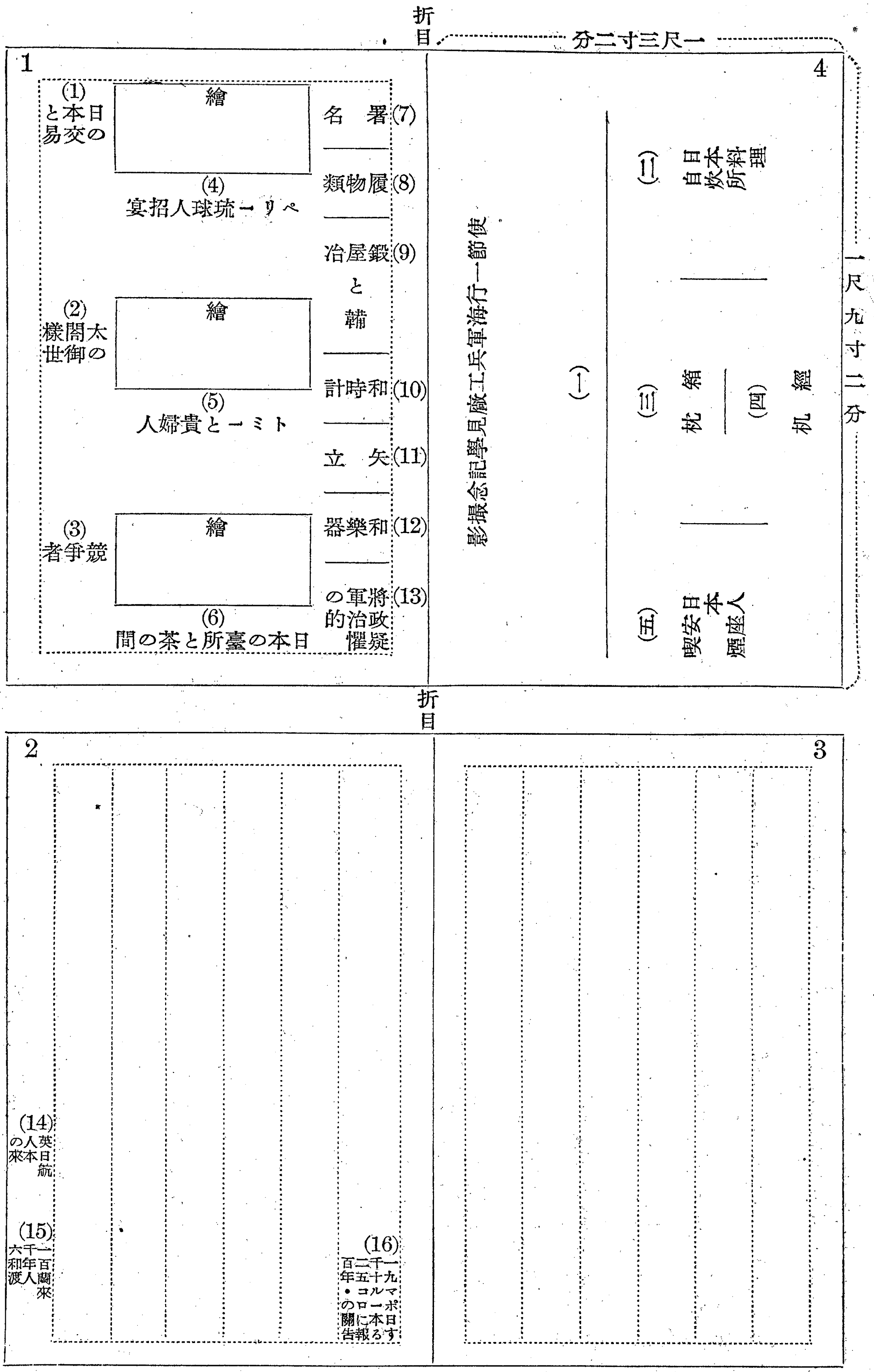
前にも述べた通り、何等頁付けもなく、項目そのものにも、勿論別に番號がある譯ではない、紹介說明の便宜上自分が付けたに過ぎないことを承知して置いて頂きたい。以上述べたところを一目明瞭にする爲に、表示すれば次頁のやうにならう。

この一枚の號外は曾に日本遣米使節一行に關する記事ばかりでなく、その當時亞米利加が日本に關して知つてゐた知識の縮圖とも見らるべき程の內容を盛つたものである。日本の北は箱館、南は琉球、東は小笠原列島に關することから、如何なる目的によつて日本を開國させ、如何なる物資を出入させればよいか等、種種面白い記載を乘せてゐる。

誰れも知るやうに一八五四年（安政元年）三月、德川幕府は米提督ペリーとの間に締結された神奈川和親條約の批准交換の爲、時の外國奉行新見豐前守正興を正使とし、村垣淡路守範正を副使とし、小栗豐後守忠順を監察とし、立石通事その他一行八十餘名で彼の地に乘込ませたのである。

この新史料の內容を說明する前に、亞米利加が、日本を開國させる迄の概略を記することは、事件の續合を了得する上に必要であらうと考へる。乞ふ暫くこれに目を轉ぜられよ。

二　太平洋と日米



折目
一尺三寸二分
一尺九寸二分
1
(1) 日本との交易
繪
(4) ペリー琉球人招宴
(2) 太閤様の御世
繪
(5) トミーと貴婦人
(3) 競争者
繪
(6) 日本の臺所と茶の間
(7) 署名
(8) 履物類
(9) 鍛冶屋と鞴
(10) 和時計
(11) 矢立
(12) 和樂器
(13) 將軍の政治的疑懼
4
(一) 使節一行海軍兵工廠見學記念撮影
(二) 日本料理自炊所
(三) 箱枕
(四) 經机
(五) 日本人安座喫煙
2
(14) 英人の日本來航
(15) 一千六百年和蘭人渡來
(16) 一千二百九十五年マルコ・ポーロの日本に關する報告
3

御承知の通り、目下我が日本は有史以來未曾有の非常時に直面し、西の隣邦支那に對して、新しい防共政策に組みするように促しつつあるときに際し、東の隣邦亞米利加はパナマ運河に不足を感じ、新にニクヮラが運河開鑿に從事するとかの外電が傳へられてゐる昨今、所謂太平洋問題は今後益〻多事にならうとしてゐる。日米兩國の太平洋に有つ關心は漸次緊迫化しつつあることを留意しなければなるまい。

さて亞米利加の船が太平洋側へ進出したのは、西紀一七八四年卽ち乾隆帝の四十九年、日本光格天皇天明四年である、換言すれば合衆國獨立の翌年である。南洋から佛艦に好意的に廣東に案內されて來たのがその初めである。爾來屢〻現はれてゐる。當時米船は阿弗利加南端を廻航して來たり、南米の南端を廻つて太平洋に來てゐたのである。米船は南太西洋に捕獲した海獸の毛皮を支那への賣込み、支那からは、茶、絹、陶器等を買込んで歸航してゐたのである。ところが北米大陸西北海岸にも、毛皮獸のゐることを知つた米船は、段段と北上しこの方面からの毛皮をも支那へ賣込んでゐた。然るところ一八二〇年（文政三年嘉慶廿五年）前後から、毛皮の需要が社會から減つて、漸次取引面白くなくなつたので、茲に方向の轉換をなし、太平洋上の捕鯨事業に乘出し、鯨油の利益を目的として活動し始めたのである。一方にまた英國が支那へ印度產阿片を輸入せるに競爭し、米國は專ら土耳古產阿片を密輸してゐたものである。清英の間に阿片を中心に戰爭が起るや（西紀一八四〇—四二年）、米國は終始その成り行きに注意してゐた。南京條約の結果一八四二年、支那は廣東・上海・廈門・福州・寧波の五港を開いたことを知つた亞米利

加は、カッシング（Cashing）を使節として支那に送り、逸早く米清通商條約締結に成功した。これより亞米利加の對支貿易は、年年盛んとなつて行つた。併し當時はなほ未だ太平洋を横斷して東亞への直航は出來なかつたのである。ところがここに端しなくも新事態が發生した。卽ち一八四八年（嘉永元年）ペリー提督が日本へ渡來する五年前、亞米利加は墨其古より北米西海岸地帶カリホルニヤ地方一帶の地を奪ひ、次いで同年同地方に金鑛を發見し、その海岸に桑港が開かれ、ここに亞米利加合衆國は始めて太平洋に直面し、易易として北太平洋に活動出來るやうになつた。對支貿易が愈〻益〻有益と見るや、太平洋を横斷して往來するといふことが考へられたことは、當然の成り行きで、次いでその往來の途上に横はる日本の港を開かせようといふ考は、これ亦自然に起る欲求としてあたりまへのことである。その開港によつて薪炭・飲料水の供給を受ければ、非常に便益であるからである。開國が出來れば、兩國の間に通商によつて有無相通じ、相互に多大の利益を得ることは言ふ迄もないことである。一方また捕鯨事業に活動中の米船が、難破漂流して日本沿岸に到著することも屢屢であつた。一八四六年（弘化三年）、一八四八年（嘉永元年）等。連年のやうに起つたのである。亞米利加側から言へば、捕鯨船保護の必要上からも、日本の港を開かせる要求が、年一年と緊迫して來てゐたのである。

かやうな次第で、合衆國が日本開國を欲することは、自國の生存の上に絶對的のものとなつて來た爲、既にペリー提督來航以前にこれを企圖したことは、一再にして留まらなかつた。

卽ち亞米利加が日本開國を促したのは、一八三二年（我が仁孝天皇天保三年）米國政府が Roberts なる者を南洋に派遣の途次、日本開國を慫慂しようと企畫したのであるが、これは不幸實行に及ばなかつた。次は一八三七年（天保八年）米國 Olyhant 商會が Morrison 號といふ船を浦賀に入港させたが砲撃されて空しく歸へり、薩摩灣にも現はれて追拂れて了つた。

一八四六年七月（弘化三年）には Biddle を日本に派し、江戸灣に入り、浦賀に著いた。ここに日本開國の意志ありや否やを探らしめたが、不許を以て拒絶され空しく歸つて了つた。

米國では Biddle の軟弱なる態度に飽き足らず、そこに前にも述べたやうに一八四八年西部海岸地方の占領となり、日本と直接交通の必要を痛感し、ペリーを派遣する事情となつたのである。

一八五三年七月八日（嘉永六年六月三日）ペリーの率ゐる艦隊が浦賀に入港し開國を迫つたのである。幕府は翌年を期して交渉に應ずる旨を答へた。そこでペリーは浦賀を拔錨し、琉球に向ひ那覇に貯炭所を設け、支那への足溜りとした。ペリーは一八五四年二月再び浦賀に來る途中小笠原島を親ら視察し、南部を一時占領し、勢を以て入港し强硬な態度で談判を開始し、應じなければ本國から艦隊を增發すると强迫した。これでとうとう同年三月三十一日（安政元年三月三日）、神奈川條約を結び、下田、箱館の二港を開くことを約すこととなつたのである。

三　日本との交易(1)

「日本の大使一行は、歸國の後自國の製造工業に非常に多くの改良を加へるであらうことは、疑のないことである。この二三週の間、我が國の主要都市を實地見學して、社會のあらゆる要求が機械の動力によつて補給せられ、またそれ等の要求が た易く滿たされることによつて、益〻伸展されて行くことを目のあたり見て、大使一行は、全日本の製造工業組織の再建設を、東洋流の趣味と要求に合するやうにと、歸國後には〔當局に〕推薦することであらう。

日本の勞働賃錢は、非常に安す過ぎるので、機械を紹介するには、不適當かも知れないと言ふことである。日本國内の財源及び産物に就いて、吾吾はほんの少しきり知らないし、また製造される品物に對して、あれだけの需要では、日本の現在の狀態に合はないといふことを考へるとき、彼の國の勞働賃錢の問題などは、ほんの小さな障害に過ぎないのである。このことは吾吾自身の經驗が明らかに證明してゐる。過去に於けるありとあらゆる發明が紹介されたときの叫喊を、誰が思出さないで居られよう、例へば印刷機とか、ミシンとかの發明が發表されたときなどの叫喊を。それは皆、多くの職工が職を追はれると思つたからである。それにも拘らず勞力を省く機械は、百パーセントの要求を以て彼等の製品の安價の物にと增して行つたのである。

茲で日本からの輸出品の主なるものを列擧して見よう。陶器の工場に於いて、將來營まれるであらう所の貿易額に就いて發表を、誰が今ここで話すことが出來よう。吾吾モダーンな趣味に合ふやうな形や、飾やを考慮した曉には、世界一立派なものになることは疑ないことである。彼の國のこれ等の品物の非常な低廉な價格は、裝飾品としても、亦必需品としても、吾吾商人の冒險に充分に報いて呉れることであらう。

縮緬或は絹織物のやうな品物に於いては、日本は遙に支那に優れてゐる。吾吾が今日支那から得てゐる多くの縮緬は、日本から來たものを廣東でショールに仕上げられると言ふのが、その國を訪れた多くの歸國者の意見である。

この一事は、他の輸出品目にも適用し得ることは明かである。それゆゑ現在非常に安いこれ等の物資が、よしいまの二倍となつたとしても、彼等と直接取引によつて得る代償としては、非常に些細な障害に過ぎないであらう。

この國に於いて、好い紙を作る爲には、安價で而も無制限に得らるる材料を、補供するように工夫することを多くの識者の意中に考させる必要がある。何故我が國へ輸入されるやうな型に日本紙の材料が變へられないのであらうか、また吾吾の改良された製紙機によつて作られるやうにならないのであらうか。非常に原始的な方法に於いてさへ、彼等日本人は、最も立派な薄葉から最も厚いボール紙に至る迄

の製造をやつてゐる。纖維が非常に長いので、紙は頗る强靱である。この材料はまた紙以外の目的にも使用さるるに相違ない。

美事な混合物である木蠟がある。これ等の他に樟腦や、漆器や、鑛物質や、木材の象眼の家具や、玩具等が、あることをつけ加へておかう。

〔七寶〕や、〔金、銀象眼〕

私達は日本に逗留中、素張らしい鑄造物(鐵)の標本を見た。日本人は眞鍮や、青銅の立派な裝飾品の技術に於いては、我が國に少しも劣つてゐないといふことを發見した。唯一つ革の製造に於いては、彼等日本人は、全くそれを無視してゐると言つてよい。日本人は非常に多くの動物の群を飼つてゐる。併しそれ等はほんの駄獸に過ぎない、何等役に立つてゐない。日本へ製皮革業を紹介することは、決して無駄なことではないと信ずる。

非常に良質なお茶も亦すばらしい發展を遂げてゐる。若し西麻を彼の地に移植繁殖せしめたならば、それこそまた一つの立派な物資を加へることにならう。

現在彼等日本人が、我が亞米利加から要求してゐるものは、非常に安い木綿類(綿布)である。英國が支那と交易してゐると同じやうに、吾吾が彼の國と交易してはならぬといふ理由は、何處にもないのである。農具も亦彼の國では要求されてゐる。吾吾は彼の地で常用してゐる米の製造に使ふ新式機械の缺・

如についても、深い留意をなすべきである。次に人力、水力、馬力などによつて、簡單な製材の方法に於いても、新しい機械が必要であることは勿論である。その他製糖機械も、莫大な利益ある輸出品となるであらうと思ふ。

以上列記したやうに、多くの品品の交易が今日より以後五年の間、日本と我が國との間に、筆紙につくしがたき利益を以て、取り行はれることであらうと堅く信じて疑はない。かかる物資は、太西洋岸からサンフランシスコへ完成した太平洋鐵道によつて、運搬するのが、他のどの道よりも近いと思ふ、支那經由の方法よりは、遙に近く遙に安全である。」

この項を一讀すると、恰も今日の支那と我が日本との相違が、一世紀許り以前の亞米利加合衆國と、日本との相違であるかのやうに思はれて、非常に興味深いものがあるを感がする。例へば彼れ米國に於いて諸の機械力の優れたるに對し、我が日本に於いて勞働賃金の極めて安きが如き、全く目下の日支間の關係と同樣であらう。

當時の日本が米國から安い綿布を要求せると同じく、目下の支那は日本から綿布を求めてゐる。

日本の陶器、絹織物、茶、紙、樟腦、木臘等に關する製作技術の優秀を賞讃し、開國後將來に上るべき貿易額の頂點を、今日から誰が豫想し得ようと言つてゐるが、果して然りであつた。ここに特に面白いと思ふことは、縮緬及び絹織物に關する一條である。絹織物の技術の卓越せることは、遙に支那を凌

鴉し、從來米國人が廣東から得てゐたものは、もと日本から支那商人によつて廣東に運ばれ、若干の加工をなせる後、米國向きとして輸出してゐたといふ事實は、恐らく信實であらうが、寡聞なる自分には、今日までかやうなことを知らなかつた、誠に興味深い史料であると言はねばならぬ。

次にまた頗る示唆に富める一條がある。我が國に於ける皮革製造の貧弱を說き、日本に製皮革業を紹介することは決して無駄なことではないと言つてゐる。また彼等日本人は全くそれを(皮革製造)無視してゐると言つてよい。日本人は非常に多くの動物群を飼つてゐながら、それ等はいづれも、駄獸であつて何等の役にも立たぬとも批評してゐる。尤も日本に於いては古來皮革製造の如きことは、賤民のなすことであつて、特種階級の生業に屬し、一般からは卑しまれてゐたことであるから、彼等外國人には右樣に見えたことは當然のことである。併しまた皮革の用途が、外國程廣くなく、その上日本國中佛敎によつて、かためられてゐた德川時代一般の民衆には、殺生禁斷といふ思想からも、動物の皮をはいで使用するなどのことは、好ましくない生業であり、潔癖な日本人には、忌み嫌はれたものであらうことは想像に難くない。がこと今日に及んで生活樣式の變遷、軍事裝備の充實等に思を馳せ、今次の日支事變目下の狀態に於いて、我が國皮革飢饉の聲を聞かさるるとき、既に一世紀以前に於いて、彼國米國人が吾吾に與へた警告が、大に玩味すべき暗示となつてゐるやうに考へられて、盡きせぬ興味を感ぜない譯にはいかない。

四　ペリー提督の琉球人歡待(4)

ベッテルハイム博士は琉球に數年間在住せる人であるが、曰はく、「この國は或る程度まで獨立國ではあるが、殿樣は北京政府へ度度朝貢せる爲、王と稱することを許されてゐるが、未だどう見ても、日本國の一部分である」と。

艦隊司令官（ペリー）は那覇(Napha)の殿樣と勘定係とを再度招待する御迎ひのボートを送り、六月二十八日の火曜、サスケハナ(the Susquehana)艦上で會食せんことを申出たところ、心よく招待を承認された。

宴會の當日に招待されたお客を運ぶ爲、三艘のボートがツマイの入江へ漕ぎ出された。例のやうに紅色の招待狀が提示され、彼等は草の纖維織(上布)の非常に見事な清楚な服裝で、頭上には派手な色合のハッチー・マッチー(鉢卷)を冠つて、旗艦にやつて來た。ブカナン艦長は、舷門にこれを出迎へ、艦中のあちこちを通つて彼等を案內した。

招宴は勿論全然歐風と米國風によつて行はれた。提督は卓の中央を占め、殿樣（統治者）を彼の右席に、勘定係を左側に坐らせ、那覇の市長(組頭?奉行?)と他の勘定役の中一人は卓の末席近くに並び、艦隊他船の司令官達によつて、兩端の席は占められてゐた。

艦室内は蒸暑かつた、宴たけなはになると、お客は益〻熱くなつてゐた。（なぜならば、彼等は非常に堅くなつて眞面目に構へてゐたから）、とうとう烏帽子を脫がせて欲しいと言ひ出した。これが許されると、各人のお伴隨者はその背後に立つて、その御主人の丸頭をはげしく扇ぎ始めた。スープの後にポンスが出た。〔葡萄酒又はジン、レモン汁、湯、牛乳、砂糖を混和したもの〕これが新に彼等の味覺を喜ばせた。彼等はお土産に彼等の酒（日本酒）を提督に贈り、提督はこんど彼等に世界各地産の酒を饗應することにきめ、その場にすぐ、佛蘭西及び獨逸の葡萄酒、スコットランド及び亞米利加のウヰスキー、マデラ酒〔太平洋中にて阿弗利加北岸より四百浬にある、同島産の白葡萄酒〕や、シェリー酒〔西班牙の都 Xeres 産白葡萄酒、南西班牙一帶の産〕、和蘭の火酒（ジン）が出で、最後に甘（おいし）いあまたるい然し強いマラスキー酒〔小黑櫻果子から製せる酒〕が出たが、これは彼等にとつては確かに、賞讃に値せるものであつた。彼等は舌なめづりをし、眼をつむつて、透明な美味の各杯を啜つた、いはば節酒の德に對する頗る情ない鑑賞を示したのみであつた。

鑵詰の牡蠣や、その他亞米利加で詰められた食品が、彼等の食慾と同樣に、彼等の賞讃も限りなく興奮した。デザートの一部に小笠原島から將つて來たメロンとバナナが有つた。これ等のものは、完全に彼等を虜にした、そして彼等は家妻に土産に持つて歸りたいと賴み出た。その申出では勿論きき入れられた。すると立ちどころに彼等の衣服の帶から上部のゆるやかな折目のところは、ポケットに早變りし、

そこへ詰めこまれるだけ詰込まれた。

事態がここ迄到つたときは、葡萄酒と祝宴の潮が正氣な判斷の乾ける陸地に確乎と浸し始めるのぢやないかしらと思はれるに十分の理由があつた。一切の心置きはもう全く打ち解けて了つた。陽氣な那覇の老奉行のテラテラした顏には、滿足し切つた物靜かな落付きが現はれてゐた。二人の老いしなびた勘定役の皺のよつた顏は赤らみ、段段眞赤になつて行つた。ただ殿樣だけが默默として、氣遣はしげな態度を保持してゐる。その結果、彼はいくら飮んでも醉はずに平素と同じく非常な威儀を保つてゐた。彼殿樣が心から友情的に見えたのは、唯だの一度、それも提督が亞米利加產の草花や野菜の種子類を、彼に捧呈した時だけであつた。これ等の種子を彼は蒔いて注意深く培養しようと約束した。尤も提督は以前にも、この度のやうに、牛や水牛を移植したことがあつた。そのときも殿樣は、喜んでこれを飼ひ念入りにこれを育て、その子孫は後後迄も飼養しようと約束したのであつた。」〔　〕內は筆者の注記である。

この項の劈頭に見えるベッテルハイム（B. J. Bettelheim）なる人は、ハンガリー生れの猶太人で、或る英國の婦人と結婚して、後に妻女の國籍に移して英國人となつた人である。職業としては本來は醫師であり、後段見える Dr. M. は醫博のタイトルを有つてゐるからである。ところが彼は一八四六年（弘化三年五月）宣敎師として妻子及び僕を伴つて琉球に來航し、那覇の護國寺に留錫し、琉球語及び假名

文字、俗文を習得し、民間に布教傳道と醫療施薬とを行つてゐた。一八五三年迄同島に逗り、その布教及び聖書の翻譯上、頗る功績を殘した人である。彼が我が片假名を以て、新嘉坡に於いて印行した聖書は、卽ちこの間の苦心の結晶であるとも言へよう。因に我が東洋文庫はこの稀覯なる聖書を藏してゐることをも、茲に付記しておかう。

この間の事情は、Letter from B. J. Bettelheim, M. D., giving an account of his residence and Missionary labors in Lewchew during the last three years. と題して、パーカー牧師 (Rev. Parker) に宛てた書翰中に詳しい。それは廣東で一八五二年刊行された Chinese Repository. 第十九卷に收錄されてゐる。なほ他にも二三の誌上にも載つてゐるがいまは略すこととする。

さてペリー提督が米大陸と支那而も南支廣東との通航の途中、琉球に著目したのは當然のことで、ここに貯炭所を設置することに成功したのは、一面この饗應政策が與つて力あるのではないかと考ふるとき、この記事中に、「再度の招宴」なることが讀まれ、またその末尾の條にも、殿樣に向つて過去に於いて珍しき草花や野菜の種子を贈つたり、牛や水牛を贈物として差上げたことを載せてゐるところを以て見れば、貯炭所設置に就いて、再三交涉のあつたことを認めざるを得ない。この旗艦上の饗宴が、かくも、詳記されてゐるとは、これまた日本開國史上の裏面一挿話として興味津津たるものを感ずるのである。

五　三使節の署名(7)

ここで正副兩使節及び監察の三人の自署に就いて述べることとするが、その前に三使節が、彼等米國人にどう見えたか、少くとも彼等と同航した一人の目に映じ、耳に聞えたところに聞くこととしよう。

ジョンストン中尉は、その艦中に於いて觀察調査した三使節の經歷、人となりを述べてゐる。然も自らかう書き加へてゐる。「自分の調べは簡略ではあるが、その述ぶるところは眞實性の價値あることは確信する、決して恣に想像を逞うした虛構の報道ではない」と、よつて彼の耳目に觸れた三使節を紹介するのもこの際徒勞のことでもなく、また却つて興味を增すことと信ずるがゆゑに、敢へて添筆しておくこととする。

「正使新見豐前守は、江戸の生、年の頃三十七歲、どちかと言へば無口の人である。併し頗る圓滿な相を備へ、慈愛深さうな、極めて親み深い氣のおけぬ人である。彼はまた決して才氣喚發といふ柄の人ではない、併しどこ迄も平和と親切の氣質と心の所有者であつた。その出身が名家であるだけ、その風采から見ても座作進退から見ても、非の打ちどころのない上品さを有つてゐる。これはどこの國の上流社會でも共通な一つの特徵を想起させる。彼はこの度遣米使節正使を拜する前には、天皇の侍從としてその職に在つた。天皇は彼に特志を以て昇敍を授け、また彼を派遣する合衆國に對しても、敬意を示す爲

に、授くるに守なる稱號を以てした。そこでこの守なる言葉であるが、これには公侯といふ意味と、神道や佛教の弟子や信者達が、その崇拜してゐる無數の神佛とに關係ある精神的の意味を含んでゐるのである。――これ等島國の人人は、非常に大望を懷き、啻に今世の榮達だけでは、滿足しないからである。――彼は所謂三百六十諸大名の中ではなかつた、換言すれば世襲的な貴族の出身ではなかつた。彼は曾つて町奉行を勤めたことは、あるらしいが、一城一藩の公侯ではなかつた」と書いてゐる。

次にジョンストン中尉は筆を轉じて、村垣副使の上に馳せてゐる。

「副使村垣淡路守は、年齡略ぼ五十歲前後、勘定奉行森田岡太郎を除けては、一行中の最長老である。この人は航海中、常に船暈になやまされ、ホノルル市著迄は多くは船室にのみ這入つてゐたので、上甲板に現はれることは滅多になかつた。從つてこの人と話合つたものはなかつた。この人は曾つて箱館奉行を勤めたことがある。實はこの人の方が正使よりは優秀な知能の所有者であるらしい。とはいふものの自分達は、正副兩使節とも直接に話合つたことがないのであるから、これは臆測で、その眞僞は全然保證の限りでない。併し彼は使節一行に重味をつける爲に、介添役としてやつて來たのである。されば こそ彼は、何等の相談に與ることもなく、また進んで自分の意見を吐露することもなかつたらしい。彼も亦世襲的の大名ではなく、旗本出身の役人である」と記し、更に中尉は第三使節監察小栗豐後守に言及してゐる。卽ち

「小栗豐後守は一行中で一番敏腕であり、且つ實際的の人物であることは確かである。使節等が訪づれた各官廳の役人との交渉は、殆ど全部彼の手によつて處理された。彼は四十歳前後の小柄の男である。骨相學の上から判斷すると、優秀な智腦的の人である。彼の顏には若干の痘痕があるが、智力と聰明とで輝いてゐるので、見ともなくない。今次の冒險的前例なき旅行を續けてゐる一行の動靜を、明確に忠實に將軍に報告するのが、彼の使命である。守の稱號は彼が使節の一員に任せられたときに、始めて授けられたのである」と書いてゐる。これに對する當否の批評とか、考證とかをすることは、一切これを省略する。

さて愈愈署名の問題であるが、後にも述べる如く、甚だ奇妙なものである。これが如何なるときに書かれたものかに就いて、克明に考究して見る必要があらうと思ふ。三使節が費府入市のときに、フィラデルフィア・インクワイヤー誌の記者に需められて、急遽各自署名を了したものか、それとも華府入著以來、各官衙、諸長官等に面接取次の必要上、または謝辭の挨拶の爲に、かうした三者連名の名刺でも彼の地に於いて作つたものか、或は日本內地からこれを用意して行つたものか、或は用紙だけ携へて印刷なり筆記なりを彼の地に於いてなしたか、固より的確に知るべき材料を持ち合せない。が併し、彼等が日本紙に連名の名刺樣のものを使用してゐたことだけは、一八六〇年六月二十日付、紐育ヘラルド紙に載せてゐる華府通信によつて明かに分ると思ふ。卽ち、「使節一行が議事堂を訪づれた後のことであ

る。彼等は上院議員の自宅に車を馳せ、名刺を置いて挨拶をした。これ等の紙は桑〔楮の誤？〕の皮から作つた紙で、幅三寸、長さ六寸程のものであつた、その上三使節の名〔新見・村垣・小栗〕が、日本語及び英語で書かれてゐた」と報じてゐる。

果して然りとすれば、ここに掲ぐるものはその名刺から複寫したものと見るのが至當ではなからうか、自分は昨年史學會大會國史部會に於いて、記者のインタービューに、需められて署名したものらしいとしたのは、茲に訂正しなければならない。その日本字の部分に就いては、毛筆で書かれ、羅馬字の部分は活字やうになつてゐることは、寫眞で御覽の通りであるが、いづれも手記したものである。

さてその毛筆で書かれた部分であるが、勿論凸版で寫したものであらう。就いてこれを見るに、頗る珍現象を發見する。卽ち次に示すやうな興味ある順序と字配りとになつてゐる。「堀見豐前守、村垣淡路守、小守後豐栗」卽ちこれである。副使村垣淡路守だけが正當な書方であるが、他の二人はそれぞれ變つてゐることは、氣附かれたことであらう。すると次にこれがどういふ譯であらうかといふ疑問が起らざるを得ない。これが木活であるとか、玻璃版で一字一字切り細ざいて製版したとでも言ふなら、その手續の途中で漢字に對する知識の缺如から起つた職工の間違と見ることも出來ようが、この場合は肉筆をその儘凸版に付したものであらうと考へられるし、矢立や毛筆のことも後に述べるやうに、驚くべき正確さと迅速さで書くと、記者が見てゐる前で誰かが書いても見せたものであらうから、記者が殊更

に切り細ざく譯がない。さうすると彼等新見、小栗の二人は、何か意あつてかやうに書いたものと見なければならぬ。然らばどういふ譯かといふと、自分はかう考へて見た。新見、小栗の兩人は、外國奉行でも勤める程の人であるから、多少外國の事情も知り、歐米人はその姓名を逆に書くとか、或は倒に記すとかいふことを聞いてゐたので、彼等の灰殻好みとでも言はうか、半可通とでも言はうか、若干の好奇心や遊戲心も加はつて、かやうなものが出來上つたのではあるまいか。村垣一人が正しく書いてゐる點や、前者二人の通人がつた點を、側面から裏書するものが、ジョンストン中尉の「航海日記」にも見られる。「日本の使節一行は、二派に分かれてゐるやうに見受けられる。一は外國と交際を可とするもの、一はこれを否とするものである。正使（新見）は前者に屬し、副使（村垣）は非交際に加擔する傾がある云云」とあるのが、卽ちそれである。もとよりこの署名は當人は至極眞摯に考へてかうしたものであらうから、今日他から見れば幾分兒戲に類したやうに見えるけれども、これで正しいと考へてゐたに相違ない。併し批准書正文には三人共正しく書いて花押をしてゐるところから察すると、公文書の眞摯なときは、別な考へ方をして見ねばならぬものではあるまいかとも思はれるのである。三者の文字が非常に似通つた筆致であることも疑はしいと思はれないでもないが、兎に角誰かの惡戲であらうなどとは思はれない。尤も批准書の署名は書記が三名とも書いて、花押だけを各自が書いてゐるやうである。いづれにしろ、かやうなものが存在することだけは、絕對の事實であるから、これを江湖に紹介し、大方の

研究に待つこととしたい。最後にこの三使節の羅馬字の綴り方も、問題とならう。未だこの頃はその綴り方も確定してゐないし、日本人の發音をよく聞きとれなかつた勢もあらうし、華府と費府とでも違つて綴つてゐるし、實に色色まちまちである。これ等の點に就いても日本羅馬字の發達研究資料として面白いものと言はねばなるまい。

六　矢立と毛筆 (11)

「日本人はペンとか、鉛筆とかを使つて字を書かないが、美しい筆と唐墨を用ふる。墨は筆を保管する柄のついてゐる携帶用の壺に這入つてゐる。彼等は驚嘆すべき迅速と正確さを以てこの筆を運ぶ。墨壺は折疊まれて、腰に指して持ち歩かれる。大層小さつぱりしたものである」と禮讃してゐる。

七　千二百九十五年マルコポーロの日本に關する報告 (16)

「日本の存在が始めて歐西に知られたのは、一千二百九十五年のことである。マルコ・ポーロはかれの亞細亞旅行を了へて、支那の東方海上に横はる大島嶼に就いて、かれの知れる總てを記錄し、剩へその位置を地圖の上に示した。かれはかの島島をチパング (Zipangu) と、支那で耳にした名稱で以て呼んだのである。この記述は餘り信用されなかつた。そして第十六世紀に到る迄、一般には忘れられてゐた」

と。

以上が同誌上マルコ・ポーロの報告の全文である。一二九五年は我が伏見天皇の永仁三年、北條貞時の執權時代である。支那に於いては元の成宗元貞六年に相當する。歐米諸國が我が國を呼んでジャパン（Japan 英・米）、ヤーパン（Japan 獨）、ジャポン（Japon 佛）、ジィアポン（Giappone 伊）等といふのは、皆このマルコ・ポーロの報告から訛つたもので、當時元の世祖忽必烈の時代に、ポーロが親しく耳にした日本國（ジーペンクオ）（Jipenkuo）が伊國訛した結果（Zipangu）となつたものであることは、東洋學界の定說であるから、これ以上の詳說は避けることとしよう。日本の國號呼稱問題に就いては、筆者に私見があるが、いまはこれを略しておかう。

八　太閤樣の御代（2）

太閤樣は曾つて日本を統治せる諸侯中の最も偉大な一人であることは疑ない、彼は比較的大きな領國を一手に治めて居た勢力ある諸侯を、完全にその配下にした最初の一人である。斯くして彼は國力を鞏固にし、光輝ある外征を可能にした。彼が「一五九一年」臥亞の葡國印度太守に送つた書簡中には、彼の勢力の自己認識が示してあり、外部の世界に對する大體の見解が示されてゐる。

「この無邊の君主國は不動の岩の如く、總ての敵の努力を以てしても、之を搖がすことは出來ない。か

くて吾は國内に於いて安泰であるのみならず、吾が當然うくべき忠誠を示さんとて遙か遠阪の國國からさへ朝貢して來る、現にいま吾は支那〔大明〕の征服を計畫中である。然して自分の成功に何等の疑を挿まないからして、吾吾はもうぢきにお互にもつと親近になるであらう。……宗教に關しては、日本は神（カミ）の國である。卽ち神（シン）（Xim）の國である。神は萬物の根原である。……〔耶蘇會〕教父は別の宗教を傳へんとしてこの島國へやつて來てゐる。然しながら、神道は非常によく普及されてゐるから、容易に廢止されやしない。この新宗門は、單に日本國家の福祉に對し、不爲めな宗教の別種として、移入されるに過ぎない。これが、吾が敕命を奉じて以て、禁宗し說教を禁止した所以である。……にも拘らず、吾は吾吾の交易關係は以前通りの立場を維持して行きたいと考へる」と。

以上同號外に揭ぐる葡國印度太守宛の書狀なるものは、當時我が國中を巡錫中の耶蘇會巡察使アレサンドロ・ワリニャーニ師が、印度太守の書を秀吉に進めたるに對する返書である。如何に秀吉が大抱負を懷藏してゐたか、外臣に向つて力强く日本精神を說いてゐるかを、窺ふことが出來ると同時に、前に揭げた書狀の略を補ふことが出來ると考へるがゆゑ、ここに繁を厭はず、引用することとした。

遙に音章を寄す、披いて之を讀めば則ち萬里の海山を眼界に見るに異ならず。來簡の如く、本朝は邦域六十有餘、積年亂日多く、而して治日少し、故に凶徒奸謀を好み、群士黨與を作り、而して朝命に服從せしむるを得ず。予や、壯歲の日、曛旭之を嘆惜す、修身の術、治國の要、深謀遠慮、而して仁・明・

武の三を以て諸士を撫養し、百姓を哀憐し、賞罰を正し、安危を定む。此れに由つて久しく星霜を歴せずして天下混一し、盤石を安ずるが如く、異邦遐阪に及び、亦來享せざるなく、東西南北、唯だ命之れ從ふ。此の時に當り、聖主の敕を寰中に傳へ、良將の威を塞外に振ふ、四海悉く關梁を通じ、海陸の賊徒を討ち、國家人民を安じ、吾が邦已に晏然たり、然りと雖も一に大明國を治めんと欲するの志有り、不日樓船を泛べて中華に到るは、掌を指すが如し。其の便路を以て、其の地に赴くべく、何ぞ遠近異同の隔を作さんや。夫れ吾が朝は神國なり、神は神なり、森羅萬象一神を出でず、神に非らずんば其の靈生ぜず、神に非らずんば其の道ならず、增劫の時も此の神增さず、減劫の時も此の神減せず、陰陽不測之を神と謂ふ、故に神を以て萬の根源と爲す。此の神、竺土に在りては之を喚びて佛法と爲し、震旦に在りては之を以て儒道と爲し、日域に在りては諸れを神道と謂ふ、神道を知れば則ち佛法を知り、又儒道を知る。凡そ人の世に處するや、仁を以て本と爲す、仁義に非らざれば、則ち君も君たらず、臣も臣たらず、仁義を施さば、則ち君臣父子、夫婦の大綱、其の道成立す。若し是れ神佛の深理を知らんと欲せば、懇求に隨ひ而して之を解脫すべきなり。爾が國土の如きは、教理を以て專門と號し、而して仁義の道を知らず、此の故に神佛を敬せず、君臣を隔てず、只だ邪法を以て、正法を破らんと欲するなり。今より以往、邪正を辨せず、胡說亂說を爲す莫れ。彼の伴天連の徒、前年此の土に至り、道俗の男女を魔魅せんと欲す、其の時且らく刑罰を加ふ、重ねて又此の界に來り、化導を作さんと欲せば則ち種類を

遺さず、之を族滅すべし、臍を噬む勿れ。只だ此の地に好を修めんと欲するの心有らば、則ち海上已に盜賊の艱難無く、域中幸に商賈の往還を許す、之を思へ、南方の土宜、注記の如く領受す、是れより給賜するところの方物は、目錄別楮に在り、餘緒使節の口實に分與すべきなり。不宣

天正拾九年七月廿五日　　關　白

印地阿　毘曾靈

最後の行の宛名は India Viceroy を漢字で塡めたものであることは誰にも分るであらう。切支丹伴天連の布教は禁止するが、通商修好だけならば差支ないといふことを明記してゐる。原文は固より漢文であるが、讀者に便せんが爲に、筆者に於いて訓讀したものであることを斷つておく。

九　將軍〔關白？〕の政治的疑懼 (13)

日本の宗教に於いては、太閤樣が明白に巧に、それを「神の宗教、神は皇子若くは皇族卽ち萬物の根源たる」と解明してゐるが、將軍は起るかも知れない神學的紛議に就いて、何も考へてゐないと推測してもよからう。彼の疑懼は全く政治的性質のものである。或るイスパニアの艦長が、イスパニアの廣大な植民地の祕策を說明せんとして、不注意にも太閤に異教の國に耶蘇教を傳道するのは、最初の、そして唯一の自然にまた容易に、征服を招致する手段であると語つた、といふことが知られてゐる。左樣な

露骨な告白が、太閤の如き明敏な頭腦の持主に聞きのがされる筈がない。これ彼が耶蘇會布教に對する、極度の嫌惡を誘導した直接原因の一つであつたらうことは、非常にありさうなことではあるまいか。

以上に將軍とあるは、或は三代將軍家光のときの、耶蘇會布教禁止問題を指してゐるのかとも考へられないでもないが、全體の上からは、秀吉に關してゐるやうであるから、將軍とあるは關白とした方がよいやうにも思へるので、「關白？」に入れておいた次第である。

一〇　千六百年の和蘭人渡來（15）

彼太閤の後繼者なる大御所樣の御代の第一年に、和蘭人は日本に現はれた。東印度會社によつて和蘭から送られた、五艘からなる一艦隊は、太平洋に於いて難破し、チリ〳〵となり、乘組員には病氣が發生し、たつた一艘だけが殘つた、船中には英國の水先案内で、その名は、ウィリアム・アダムスといふ少少教育のある人が乘つてゐた。これが日本訪問することを申出たが、それは結局そうすることとなつた。千六百年の四月（慶長五年）、かの和蘭船は、九州豐後港に投錨した。乘組員は住民から懇切に迎へられた、併し乍ら彼等は恐るべき競爭者を長崎―の葡萄牙人及び西班牙人の中に見出したのである。彼等は和蘭人を最も不正なる誹謗を以て攻擊し、あらゆる方面で、日本人が彼等に反感を持つやうに努力して見た。これにも拘らず、和蘭人は親切にもてなされてゐた。が葡萄牙人の非難のおかげで、蒙つた嫌疑の故

で、その國土を離れることは、許されなかつた。ウィリアム・アダムスは將軍自らに保護され、邸を賜つた。將軍はこの英國人を非常に重寶な有益な人間だと思つて、幕府を去ることを、決して許可しなかつた。

これは餘りにも著名なことであるから、原文の紹介だけに留めて置かう。

一一　競爭(3)

一六〇九年(後陽成天皇慶長十四年)に、他の和蘭船が日本にやつて來た。その際將軍(秀忠)は、躊躇することがなかつたので「攘夷でなかつた爲」交易關係が結ばれた(この年七月許可す)。和蘭人は長崎の葡萄牙商館の向を張つて、平戸に商館を設立した。ここ數年の間の兩國間の政治的及び宗教的抗爭によつて、高調された競爭が起つて來た。最初葡萄牙人は、和蘭人排斥の爲め執拗に將軍を惱ました。然し大御所樣(家康)は、最も舊教(カトリック)的精神から、假令惡魔が地獄から吾國へやつて來るやうなことがあつても、彼等が、私の法令を遵守する間は、天國からの天使の如く、接待さるべきであると知らせた。

一二　英國人の日本來航(14)

和蘭人、葡萄牙人の嫉視紛爭の眞只中に、日本の恩寵への新候補國が出現した。一六一三年（後水尾天皇慶長十六年秀忠）六月、英國政府から通商の目的を以て派遣された一船が平戸に著いた。そして將軍宛の英王ジェームス一世からの書翰及び贈物を載せて來た。これ等はいとも慇懃に受納され、最も好條件の通商條約が締結された。その條約中に、將軍が英國商人に賦與せる重要な特權中には、次の諸項があつた。卽ち船舶及び積荷と共に、人人及び貨物に、何等の故障なく日本帝國の何處の港灣にも入港し得る永代特許狀、及び彼等自國の風習により、あらゆる國民と居住、賣買、取引する特許、及び自由に逗留し或は歸國する特許、また他の旅行免狀なしに、彼等は蝦夷の探檢に出かけさせるし、出かけても宜しい。その他の帝國の中、他の港に就いても同樣、等の特權を得た。將軍はまた英國君主に書簡を送つて、親愛と尊敬とを表示し、交易に望ましき一切の便宜はこれを喜んで許可する。希望とあれば平戸に商館を設立することすらも許してもよいと書き送つた。それゆえ、その他の地には直ちに居留地が作られ、通商交易は、一六二三年（後水尾天皇元和九年家光）英國人が自發的に廢棄するまでは、繼續してゐたのである。

一三　和時計（10）

日本人は時計を製作する、その方法たるや、實に驚くべき器用さと熟練とでやつてゐる。和蘭人メイランは、彼が出島在住の折、親しく見せられた日本人の手に成つた時計のことに就いて下の如くに書い

てゐる。

「その時計仕掛は、高さ三呎（吋の誤？）長さ五呎の箱の中に納められてゐる。その箱には晝時分の景色を表はしてゐる。その前景の装飾は、滿開の梅と櫻、その他の草木で蔽はれ、背景には岡があつて、そこに精巧な細工で瀧が懸つてゐる。その流は初めはそこここにある岩を周つてゆるやかに流れる小川となり、中景を走つて縦の林中に消えるやうになつてゐる。中空には金色の太陽が懸つてゐる。樞軸（ネヂ）を廻はしておいて時の搏（う）つのを示す。箱の下部には晝夜の十二時（とき）が刻み付けてあつて、時針としては遲遲と歩む龜を配してゐる。梅の枝にとまつてゐる鳥が、その歌と羽搏きで、時の終滅する瞬間を告げる。そしてその歌がとまると時の鐘が聞える、その間に洞穴（ほらあな）から鼠が出て來て岡の上を走り廻る。……かやうに各部分は見事に仕上げられてゐる。が併し、樹に比べて鳥が大き過ぎ、空に對して太陽は大き過ぎる。鼠はほんの一瞬間に山中を驅け廻つて了ふ」と。その嗜好上の缺點はどうあらうとも、その器用さと、技術の熟練さとが、解るであらう。」

更に理解を助ける爲に、昭和十一年十一月十一日、東京朝日夕刊に「日本民藝集」（七）とし左の記事が載つてゐたから、ここに掲げることとする。

和時計　すべてが優美

西洋から傳來する前に、時計は二百年前すでに日本で"和時計"が考案されて發達して居る。日本式に"刻"を報ずるもので機械、外形、裝飾など全部その當時の工人の手づくりだが、その形、金具などの美しさ優しさなど、工藝に巧な日本人ならでは見られぬ逸品が多い。わけて、當時工人が力をこめたのはベルの音で、澄んで、爽やかに鳴るベルの音色の美しさ等現在の時計の比ではない。（圖は省略した）

この項に表はれてゐるメイラン（Meijlan）は誰も知るゲルマイン、フェリックス（Germain Felix）メイランのことで、一八二七―三〇年（仁孝天皇文政十年―天保元年家齊）迄、蘭館長として出島に在つた人である。その體驗を歸國後バタヴィアから、かの有名な「歐洲日本貿易史」Geschiedkundig Overzigt van den Handel der Europezen op Japan, door G. F. Meijlan, Opperhoud van den Nederlandschen Handel in Japan, besturend lid van het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen. Batavia, 1833. を出版してゐる。彼はまたシーボルト事件にも關與した人である。

一四　日本鍛冶屋と鞴（9）

金工は錺屋とか他の實用的方面とかに澤山ゐる。日本人は鐵を炭で處理することをよく心得てゐる。彼等の鋼の質は、その刀身の光と鋭利さで證せらるる如く、非常に良好である。とは言へ、箱館で一般

に使用されてゐた刃物は實に鈍物であつた。そして艦中の一理髪師は、かの町で買つた剃刀は、にくらしい程惡質で、切れもしないし、切れるやうにも出來ないと言つてゐた。この町の中で、鍛冶屋は中中數も多くまた多忙である。が彼等の仕事の種類は頗る小範圍で、粗金（アラガネ）を多量にこなしたりしない。併し木の部分の多い（柄のこと）雜多の道具類の刃を作つてゐる。彼等の使用する鞴は特殊なもので、空氣室のある木箱で、瓣と唧子（ピストン）がついてゐて、それが手押唧筒（ポンプ）のやうに一端に於いて水平に働き、一方壓縮された空氣は、横方の二ッの出口から吐出されるのである。

燃料としては木炭が一般に使用されてゐる。その木炭は內陸の山地森林から製產され、町へ町へと駄馬の群によつて運ばれる。このやうな畜群は絕間なく、通りを駄くつて行くのが見られる。

一五　日本の臺所と茶の間 (6)

お茶の湯をわかしたり、酒のお燗をしたり、一寸した皿造らへをするのは、茶の間の中央にある炭火の爐である。但し大きな邸宅には別に臺所があつて、家族の者の食事こしらへがなされる。かやうな臺所は、普通爐が備へてあつて、これは極く平凡なフランスの調理場の裝備と同じものである。ここで薪がしばしば燃やされる譯であるが、人人はこれを使用する時、頗る經濟的に扱ふ。箱館に於いては母屋に附屬した土間があつて、そこにある納屋は、臺所若しは厩に使はれてゐる。

一六　下駄・足駄・草履・草鞋(8)

日本人は決して靴とか、または他の履物の材料として、吾吾のやうに皮革を使用しない。彼等はひらべつたい藁製以外の靴もスリッパも穿かないのである。履物は常に日本人の服裝中で、最もみすぼらしい部分になつてゐる。それ等は藁製である當然の結果、ほんの短期間しか保たない。併し多量に産出され、直段も亦安いので、日本國中何處の町でも村でも買ひ求められる。徒歩旅行者はそれゆゑ、古草鞋を道端に捨て去る、行きすがりに新しいのを買つて歩き續ける、また用心深い人になると出發に際して二三足をもつて行くのである。どこへ行つても道端に、かかる不要になつた草鞋が無數に見られる。雨天には草鞋の下に木製の下駄を穿く、これは足部に藁紐で結び付けるのである。貴顯のお方方は、時には、よく磨かれた美事な籐製表の下駄を穿くことがある。

以上のうち「草鞋の下に木製の下駄を穿く」とあるは、恐らく、表付下駄のことを指したものであらう。つまり板目下駄でないものの意であらうが、その間少少の誤解があるやうである。

一七　日本の樂器(12)

日本人は熱中的に音樂好きであるが、その音樂は歐米人の耳にはこれと言つて勸めるものは何もない。

主要樂器は三味線 samisic 卽ち絃樂器である。上流の若い女性はこれを彈くことを習つてゐる。若い婦人連が集りに出懸ける時には、必ず携へる樂器である。そしてかかる場合、女のお客は交り番に唄ひ且つ彈くのである。彼等はまた他のいろ〳〵の樂器を持つてゐる。が彼等の音樂に就いては、推奬出來るものは一つもない。」

寫眞に於いて見らるる如く、日本の樂器と稱し、而も本文説明には三味線のことを述べながら、圖には佛教儀式に用ゆる樂器のみである。所謂その頃の大衆樂器としたら、三味線の他に胡弓にしても、琴にしても皷にしても、横笛、尺八等の管・絃器を寫眞すべきであつたらうが、それに及んでゐない。これ等の認識に於いて缺くるところあるは、已むを得ぬところとして、寛恕して差支なからうと思ふ。

一八　トミーと貴婦人 (5)

日本大使一行中にトミーと呼ばるる一青年があつた。この若者は滑稽なといふよりは、何でもきたがりやであつた。彼はまたいたづらつ子で、悪いたづらの少數例外人は別として、皆から可愛がられた。彼の面相には氣立ての良いところや、ふざけ好きなところがありありと現はれてゐた。彼は日本滑稽者列傳を編する上には、必要不可缺の人物であつたらう。彼の周圍にはいつも澤山の貴婦人連が取巻いてゐた、彼の思辯は實に奇想天外であつた。「あれは一體石屋の工場なのかな？」「亞米利加の蠻人どもは、

婦人達を煉瓦で塞いでゐる」と。いふやうな考が、屢〻口外に飛び出る。そこで彼は一問を試みようと決心し、我が國（米國）の優美な婦人の一人が側に寄つて來たとき、彼はこの好機を摑まずにはゐられなかつた。そこで彼はこの迷ひ出でたる女神を捉へ、手で探つて見て、この貴婦人連が嘆賞者から遠ざかるのは、驚嘆すべき網細工に包まれてゐるからであると、それ以來輪や、箍をはめた服を著た貴婦人連は、トミーをひやかしたものである」。

以上で號外の記事は了つてゐるのであるが、この美少年に就いては、頗る無軌道的なところが多く、當時の米國の諸新聞は盛にこれを喧傳し、トミーの名聲寧ろ正使の名よりも大衆に熟知せられたと言はれてゐるから、愛敬者の挿話を二三紹介して、鹿爪らしい使節一行中に、なごやかな空氣を漂はせた一面を偲ばうと思ふ。

立石斧次郎はトミーの綽名で通り、船中でも皆に可愛がられたが、上陸後は特に婦人から持囃やされた。彼は年齡十七歳の少年で、二等通事得十郎の養子である。彼に英語を學ばさせる爲に、養父は早く彼を長崎に送り、和蘭人の學校に入れた。彼はほんの少しの單語を知つた許りであるが、その未熟の知識で、横濱へ呼び戻されて、稅關出仕通事見習となつた。彼の叮嚀で氣さくで、人なつこく而もその上機敏な性格は、稅關出入の商館店員に評判となり、非常に重寶がられたものであつた。彼の婦人接近術はまた格別の技量を有つてゐたらしく、途中ハワイに於いて既に現はれてゐた。一行が四月九日ハワイ

女王に謁見を了したその夜のことである。もと米國の軍醫であつたギロー博士(Dr. Giullou)主催の舞踏會でのこと、當夜はハワイ女王も臨御あつたのであるが、使節等は合衆國大統領への遠慮から招宴を斷つたが、隨行の他の人人は出席した。勿論茶目のトミーが列席しない筈がない。彼は終始「婦人達に視線を向け、熱心にその方を眺めてゐたので人目についた。彼は話が仕度くなると、何の躊躇もせずに、婦人連に話しかけてゐた。自分はトミーがカドリルを踊つた若い婦人の眞後の椅子に腰を掛けてゐるのを見受けた。件の婦人は暫く立ち通してゐたので、トミーは彼女は疲れてゐて席を求めてゐるのであらうと合點し、彼女の著物を私かにひき、注意を促し、甘へるやうな口調で、「どうぞお掛け下さい」と言つたらしい。その時彼女は一寸そちらへ目をやつただけで、うるさいと言はんばかりの物腰で、彼の厚意を拒んだので、彼は驚きもし恥かしくもなつてゐた」とジョンストン中尉の日記に見えてゐる。

更にトミーの氣輕さを示す一例として次の事件などは、奇拔過ぎるが事實であるから面白い。

六月九日彼等一行が、バルチモア市を出發し、特別列車で費府に向ふ途中のことである。汽車がエルクトンを距る程遠くないところにとまつた。それはキャプテン・ジュポンドが命じてとまらせたもので、使節一行に機關見學の機を與へ、また萬一望みとあらば、この鐵の馬に乘せてもよいと考へたからであつた。使節等一行はもとより機關車内は氣持ちのよい場所ではなし、お粗末なところであるから、乘るだけの勇氣はあつたが、誰一人實際に乘込んだものはなかつた。ところが、例の氣輕な剽輕なトミーだ

け、「唯一人、かやうな不快なところで平氣で旅行を續ける勇氣を持ち合せてゐた。激烈な火花、喧囂の音響、電光のやうな機關の速力、全く以て地獄といふものは、こんなところを通るのかと思はせたことであらう。ところが元氣者トミーは、時時機關手や、火夫に向つて話しかけたり、ベルを鳴らしたりして、局面轉換をなし、健氣に旅行を續け、午前三時半に汽車は費府の驛に著いた、」一行を載せた特別列車が到著するや、「彼の有名なトミーは、機關車から飛び降り、見物の人人を吃驚させた。彼はバルチモアよりの機關車に乘込んで來たので、非常に得意で興悅に入り、中途ウィルミントン附近で、或ものが、トミーに客車の方へ戻るようすすめた際に、彼は卽座に No., very good, more（いゝえここで結構、もう少し）と言つて、熱心に機械の運轉に注視してゐた」と言はれてゐる。

また一行が費府市內を行列で進行中のことである。「或るところで、トミーは、彼に手をさし伸ばして歡迎してゐる若い婦人の頰に、矢庭にキッスして大きな話題をつくつた。彼はその婦人の手を握ると、充分近く迄ひき寄せて、この儀に及んだとのことである」と、噂されてゐる。

かれは餘り貴婦人中に持囃されたので、日本に歸へることを厭ひ、米國に踏み止まり、彼の地に終つたとも言はれてゐる。

一九　海軍兵工廠見學記念撮影（一）

五月二十四日のことである。例のジョンストン中尉は次のやうに記してゐる。數日の後、彼等は二人の海軍委員をつれて、海軍兵工廠を訪れた。ブカナン・キャプテン(Capt. Buchanan)は、彼等を招じて、歡迎の辭を簡單に述べ、次に廠内を一巡、各部の作業を視せた。彼等は、巨錨の鑄造さるる樣を觀、新造汽船ペンサコラ號に取付ける筈の汽鑵を視、共に非常に感服し、周密な觀察をなし、また次いで機械部へ案内され、ここでもペンサコラ號に据付の機關が製造中であるのを見て、その大規模に驚嘆の眼をみはり、大砲部に於いては雷管の製作、充塡の作業、小銃彈の製法、眞鍮榴散彈の鑄造や、その仕上等を見せられて、米國人の優秀なる技術と、その規模の尨大なるに、新なる興味と賞讃とを禁じ得なかつた。遠に動ぜぬ正使も、米國人の工夫力の豐かなることが解り、非常に喜び且つ驚いたらしい。この使節一行を正面に据ゑて、工廠の士官等は、使節の隨行員、新聞社の記者等と共に、後方に並んで寫眞を撮した。

またこの日のことを、村垣の「航海日記」にはかう書いてゐる。卽ち

四月五日〔舊曆〕の條に。

午後二時ネビヤルト(海軍兵工廠)へ行けとて、例の人人案内し、車に乘りて先頃上陸せし所なれば、一里半もあれど、ひと走りに此局に至る。(中略)蒸氣仕掛にて種種の細工をするさま目を驚かし、奇工筆にも言葉にも盡しがたし、大砲の巢中へ錐を入れ、外を削り又は大砲の彈丸見るがうちに、百の數も

出來たり、手詰の玉、ドントル管を製し、銅板を延ぶるなど、殊に奇なり、此機關は我が國にも用ひなば、國益は言ふばかりなしと思はれける。やがて外にて腰かけて休めよとて、一同並びければ、後にブカナンはじめ立ちたりける。むかふに箱とり出し寫眞鏡に移しけり、後に此圖を一枚つづ贈れり」。

とあるのが、この寫眞の說明になるであらうと思ふ。

寫眞は前列は專ら賓客を据ゑ、後列には隨行員及び工廠側の人人である。前列向つて左より、外國奉行支配兩番格調役塚原重五郎（Tsukaharo）、外國奉行支配組頭成瀨善四郎正典（Naruse Gensiro）、副使村垣淡路守範正（Muragake Awagi no Kamie）、正使新見豐前守正興（(Sinme Bugen no Kamie）、第三使節監察小栗豐後守忠順（Aguri Bungo no Kanie）、勘定組頭森田岡太郎行□（Moruta Okataro）

後列向つて左より、

ニコルスン中尉（Lieut. Nicholson）、レーウィス中尉（Lient. Lewis）、米人某、米人某、マック・ブレーア大尉（Capt. Mac Blair）、日本人、日本人、ジュポンド大尉（Capt. Dupont）、日本人、日本人、ブカナン提督（Commodore Buchanan）、立石德五郎（Tateish Tochugoro）、見附？　栗島彥八郎（Kurisima Hechohatsero, Spy）、モーリー中尉（Lient.Maury）、松本三之丞、ワトスン事務長（Purser Watson）、米人某といふ順序である。ここに注意すべきは日本人の姓名の呼び方に對する羅馬綴りであるが、これはまた實に別別であるに氣付かれるであらう。それぞれの役名は、寫眞には勿論書いてないで、ただ姓名

のみであるが、自分が考證の結果挿入したものであることを斷つておく。

二〇　日本料理自炊場（二）右

これは一行の宿舎にあてられた華府ウィラードホテル内の一部である。かれ等は慣れぬ西洋料理に連日攻められて、大部閉口したらしく、また我が國と食事時間や、お三時（やつ）などの習慣の相違から、自分達の手によつて自由に料理をして、公式のとき以外の平素は、自炊してゐたらしいのである。これがそれにあてられた臺所と思はれる。村垣の「航海日記」中に、それと思合せらる一條が見える。

「この客舎は暫時滯留することなれば、彼は朝八時、午後三時兩度を常食とし、晩五時に茶を用ゆ、いささかの肉をそへてパンを食することなれど、おのれ等には、我が國の食事の時に調へよと言けるまま、三度の食時を告げければ、別席にてかくしたり」とある。

二一　日本人安座喫煙（五）左

これもウィラードホテル内の一部である。かれ等の隨行員等が、安座（あぐら）をかいて、喫煙し四方八方（よもやま）の話をしてゐる情景であらう。

二二　日本のクッション（三）上

これは圖に於いて見らるる通り、箱枕である。當時は日本の男女は共に髪を結つてゐたのであるから、男女ともこれを使用してゐたのである。これをクッションと注記してゐる。寢床卽ち蒲團と間違へたことも認識不足の一つであらう。

二三　日本小部屋の器具（四）下

これは經机の上に、肉地、文箱が載つてゐる。下にあるのは硯箱らしい。中には硯、水入、筆、刀子等が這入つてゐる。

二四　結びの言葉

日本最初の遣米使節の史料としては、これ迄知られてゐたものに、當時紐育市で發行された New york Herald；Harper's Weekly, A Journal of Civilization；Frank Leslie's Illustrated Newspaper；等や、英國の The Illustrated London News 等があつた。これに對應する日本側のものとしては、村垣淡路守の「航海日記」が詳細を傳へてゐることも周人熟知のことであらう。

自分が今次フィラデルフィア・インクワィヤー誌號外を說明する上に、數數援用したジョンストン中尉の著に係る航海日記は、一八六一年費府で印行された「支那と日本」と題する菊版四四八頁のものである。卽ち China and Japan: being a Narrative of the Cruise of the U. S. Steam-Frigate *Powhatan*, in the years 1857, '58, '59, and '60. Including an Account of the Japanese Embassy to the United States. Illustrated with Life Portraits of the Embassadors and their Principal Officials. By Lieut. James D. Johnston, U. S. N., of Kentucky, late Executive Officer of the *Powhatan*. Philadelphia: Charles Desilver, 1861, pet. in-8, pp 448. これである。彼は使節一行を載せたるポーハタン號便乘の士官であり、一行が華府に入市する迄、常に行を同うした人であり、その觀察緻密にして、よくその動靜を傳へてゐると考へらるるがゆゑに、他のこの種の材料よりは、信をおきて差支ないと斷じ、敢へてこれが援けを得たのである。

自分は今次の新出現史料を紹介する序(ついで)を以て、前揭の諸史料を出來るだけ一括して纏めて見ようと考へ、その蒐集に相當の月日を費し、今日可成の程度に迄進んだのであるが、これを整理し考を練るだけの落付いた時間に惠まれなく、「史學」の編輯係に多大の御延期を願ひ、御迷惑をかけたことは、慚愧に堪へぬ次第である。

次にハーパー週刊誌と、フランク・リスリー週刊誌上に載つてゐるものの、若干梗概だけを表記し、

以て同學の士の興味に訴へることとする。

一八六〇年（萬延元年）五月十九日（閏三月二十九日）發行のハーパー週刊から初まるのである。以下〔　〕内は舊曆であることを承知して頂きたい。

五月十九日〔閏三月廿九日〕新見豐前守の使節一行を乘せた米國軍艦「ローノーク」號が紐育市附近サンデイフックに投錨す。〔ローノーク號太西洋を航行せる船である〕

同　紙　江戸府内外の風景畫を紹介しこれに批評を加へ、特に面白いのは日本婦人の優美高尚なることを絶讃してゐる。

五月二十六日〔四月六日〕日本人の優秀なることを述べ、兩國開國の結果、交易をすれば相互有利であることを力説し、華府の有力者達が、使節一行を歡待これ務めたことは、一行に好感を與へ、歸國後好影響を與へることであらうと言つてゐる。

同　紙　使節一行華府に到著の情景、使節等の姓名、人數、職名、人物、服裝、態度等に關して說明し、その觀察せるところを揭げてゐる。

同　紙　使節一行大統領ブカナンに謁見の狀況を揭ぐ。

同　紙　一行費府市を發して紐育市に入る光景を描く。

同　紙　米國が日本と修交通商條約を締結するに至つたことは、歐西諸國が二百年來努力し續けて成し得なかつたのであるを、ここに日本使節を歡迎するに至つたことは、ハリスの功に歸すべきものであると言つてゐる。

同　紙　使節一行の桑港著、公私招宴の有樣を告げてゐる。

太平洋航海中一行の行狀を述べ、日本人は禮儀正しく、頗る上品で、決して西洋人に劣らない禮節と忍耐力を發揮し、乘船士官に對して滿足の意を表してゐたと記してゐる。

同　紙　一行パナマ到著、それより紐育サンディフックに航舶（ママ）したが、ここに上陸せず、華府に向ひ、ハムプトローヅに到著迄のことを載す。

同　紙　一行華府に到著、海軍兵工廠に入る。

同　紙　洗練されたる明朗な日本民族と條約批准を了れるは大成功であると論じ、ここにその使節を歡迎するは重大な意義を有するものであると述べてゐる。

六月九日〔四月二十日〕　華府海軍兵工廠に於ける使節歡迎會の模樣を報じてゐる。

同　紙　華府に於ける日本使節歡迎の舞踏會開催の樣子、米國婦人、少女數百名集り、盛大なる狀況を傳ふ。

同　紙　一行招宴の大統領主催夜會の狀況を載せてゐる。新見豐前守等一行の華府に於ける動靜を報道してゐる。

六月三十日〔五月十二日〕　紐育メトロポリタンホテルに於ける日本使節歡迎舞踏會の模樣を傳ふ。

フランクレスリー週刊の分、

六月二日〔四月十三日〕　華府ハムプトンローヅ海軍兵工廠に於ける使節一行の歡迎會の模樣を收む。

同　紙　華府ウィラードホテルに於ける日本使節一行の動靜を述ぶ。

同　紙　新見正使等米國國務卿カス氏をその官邸に訪問せる事情を報ず。

同　紙　使節一行米國大統領ブカナン氏に謁見の光景を傳ふ。

紐育市に於ける一行歡迎準備の模樣等を載す。

同　紙　使節一行華府ウィラードホテルに滯在の動靜及び同ホテル主人の歡待上の苦心を述べてゐる。

六月三十日〔五月十二日〕　紐育ユニオンスクェアーに於ける日本使節歡迎閱兵式の光景及び紐育市長の使節歡迎會の模樣を知らせてゐる。

同　紙　日本使節の來航は全米は言ふに及ばず、世界に向つて異常な興味と注意とを惹起した。これ全く米國外交の成功であり、而してここに至らしめた功績はハリスの力であるといふ。

同　紙　米國ウォルサム時計會社より將軍及び正使新見豐前守に記念贈呈の時計に關する記事がある。以上の外なほ同誌の五月二十六日、六月九日の兩紙上にも收錄されてゐるが、餘り同じことを並べても仕方なからうと考へ、これは割愛することとした。同年六月十日發行の紐育ヘラルド紙上にも載つてゐる。

大正九年十二月三日發行の、塾の田中一貞氏編纂の「萬延元年遣米使節圖錄」なる一書に附錄として「米人の見たる萬延日本使節」と題して、かの地の當時の新聞數種から摘記してゐることは、遣米使節一件その事が、福澤塾主にも關係のあることであれば、諸賢の等しく御承知のことと信ずる。最後に「繪入倫敦新報」はどちかと言へば、この問題に就いてはどうしてもセカンドハンドニュースであるから、大して重きを置くには及ばぬと思ふ。

上來紹介して來たことが、同好の士に何等かの感興をひくことが出來れば、筆者の望外の幸とするところである。（昭和十三・六・一〇稿）

●追記●

四、ペリー提督琉球人招宴の條に見えるツマイ（Tumai）の入江に就いてのことである。

自分は最初これを見たとき、一體この港は今のどこであらうかと、早速手許にある地圖で調べて見たが、那覇の附近に然るべき港灣が見當らない。それにあの地方は重要地點である爲、要塞法の適用をうけるのか、詳細な地圖は入手出來ぬのである。那覇の城下より少少遠いとは思つたが（那覇より南へ二里半許りの地）現今の糸滿（Ituman）といふ港灣が、それではあるまいかと考へて見たが、如何に外國人でも語頭のI（アィ）と語尾のn（エヌ）とを省くのは、ちとひど過ぎると思つて、どうも落付かないので、そのままにしておいた。ところが最近、沖繩縣師範學校に教鞭をとつておられた宮田俊彥君に面接の機を得たので、この問題を質ねて見た。同君も眞先きに糸滿港案を出されたが、會談中、次の興味ある示唆に富んだ案を話された。現今那覇市内の北部に泊高橋町といふところがあり、それは明治以前の船著場であつた、そこは入江になつてゐて、現在でも和船や小蒸汽船が碇泊出入してゐる。明治以後の新港は人工的に珊瑚礁を爆破してつくつたものであるが、この泊港の方は自然港である。そこでこの泊（Tomari）の讀み方であるが、那覇の地方語では、これをTumaiと發音する、更に訛つてTumi（Tamae）ともいふと。これを聞いて自分ははつたと思當るものを見出した。ここに見えるペリー提督の旗艦サスケハナ號から迎へのボート三艘が漕入れられたツマイ（Tumai）の入江こそは、この泊港のことであるに相違ないと確記することが出來るやうになつた。いまこれを讀者諸彥に報じ、併せて宮田君の好意に對して深厚の謝意を表する爲に、敢へてこれを追記した所以である。（昭和十三、七、十七）